

< 翻 訳 >

ジョン・バトラー・イエイツ

[著]

『アイルランドとアメリカからのエッセイ』
シングとアイルランド人

日 下 隆 平 訳
藤 居 亜矢子

ジョン・ミリントン・シング¹と彼の劇に関して激しい論争が新聞紙上でなされているが、これは、散文作家と詩人との間で果てることなく生じるものである。シングの劇、その序文、そしてアラン諸島に関する作品には、彼の語り口のように、自然のままの詩情、空想、素朴な人柄、文明の毒に染まることのない哲学に富む、小さな村社会が描かれている。岩の狭間に咲く野生の花と同じように、このような特質は、緊張と平穏が隣り合わせの生活から生じるのである。また、そこには苦みの強い薬草も育っている。かつて彼の会話を聴いたとき、そして、現在、シングの作品を読み、聴くとき、まれにふと考えることがある。この農民たちの社会こそ、イギリス諸島、つまり、英語を話す場所の中で唯一、シェイクスピアが幸福な客となれるところではないだろうか、と。

ショー氏²の劇に登場する人物たちなら、シェイクスピアを退屈させることはなかっただろう。それというのも、人間に関することなら、如何なるものであろうと、彼を退屈させなかっただろうと思うからにすぎない。しかし、ショーの人物たちが彼にインスピレーションを与えることは決してなかったであろう。シェイクスピアなら、その農民たちのところに少しの間でも、とどまり、交われば、オスカー・ワイルド³やショーと変わらぬウイットに富

む語り口を身につけたかも知れない。しかし、情感豊かで、詩的創造力に富む、あのシェイクスピアなら、空疎なお祭り騒ぎにはすぐに飽きてしまい、礼儀正しい農民たちと泥炭の火を囲んで座りこみ、彼らの言葉、音楽のような文や名前、民話、幽霊物語などに耳を傾けることになるだろう。そうすることで、心象、思念、人生観、愛と憎悪から成る多彩な世界全体、そして時には荒々しい感情に形象を与えるだろう。そこから彼であれば詩劇を創り上げるだろうが、それは散文作家のインスピレーションによる、機知・風刺・扇情劇などとは全く別物となろう。

シングにとって幸運だったのは、現代の改革主義者がこのような人々を「改革」の果てに地上から消滅させてしまう以前に見出したことであった。わたしたちにはそれぞれの運命がある。これがシングの運命であった。彼の人生における出来事と偶然の出会いとは全て、彼の作品に役立ち、アラン諸島の人々⁴と家族のように親しく暮らすことで、真の自己を獲得することができた。それは、たんに外部の人には英語を用いるが、親しい仲間たちとは心奥の感情と憧れを語る言葉（訳注 ゲール語）で話すことから生まれたものであった。シングの運命とは、この人々と知り合い、その生活を明らかにしてから、死ぬことであった。そして、彼の言うことに耳を貸さず、端から理解しようとしないうちから、低俗で下品な作家か芸術家、と非難されるのも彼の運命であった。連中がアイルランドにしてくれたことといえば、せいぜい、優れたアイルランド人をことごとく躍起になって押さえ込み、黙らせようとするこくくらいであった。

シングの描く人々は、飾り気がないという意味で、純朴そのものであった。ヨーロッパ女性の足を見て、中国で流行に敏感な女性であれば、無骨だと考えるだろう。だが、我々には、その足が自然な姿だと思える⁵。シングが不快に感じるのは、このような人々が、修道院の面会室や上流階級の客間では気に入られない、ということである。ニューヨークは、自らの進歩を誇り、高度な文化を持つと自負している。だが、ニューヨークが一休みして、この質素な人々について学ぶのも悪くない。ある若い女性が私の友人のひとりに

話したことがある。彼女とその仲間たちが、アイルランドでいつも楽しみと
しているのは、長い冬の夜をかまどの火を囲んで、訪ねてきた隣人たちと話
すことである、と。思うに、ニューヨークの人間はみな、退屈な冬の夜を可
能な限り短くしようと絶えず申し合わせているのではなからうか。

アイルランドは、昔も今も中世にいるかのようだ。どのように生きるかを、
生業をどうするかより、重要だと考えている。私が若い時のことだ。明朝、
日が明けると、娯楽であろうが、貴い仕事であろうが、とにかく出かけると
言おうものなら、家族みなが起きて私を送り出してくれただろう。しかし、
金儲けだけを目的とした仕事となると、召使いに給仕されて、ひとり朝食を
とることになっただろう。このように、アイルランドにおける生活は過ぎて
いく。例えば、カラン⁶がとんでもなく早い時刻に、フェニックスパークで
決闘を行ったなら、500人もの眠そうなダブリン市民がベッドから起き出
て、見に来たであろう。彼らは、決闘者たちの勇気を直に見て、カランの機知に
富む言葉を楽しむために来たのであった。そのような見物人は、危険に脅か
されようとも、何かあると必ず集まるものだった。——その当時、この国で
は銃で果し合いが行われたのである。我々アイルランド人は、今でも、昔
のまま変わっておらず、ゆったりとした時を楽しむ国民である。人が劇を見
るように、我々は人生という競技を見物し、隣人への好悪の念は別として、
彼らの競技を楽しむのである。

人生という見世物（ショー）を楽しむ故に、我々は、近代イングランドに
おいて最も有能な劇作家を何人も生みだしている。例えば、ファーカー⁷、
ゴールドスミス⁸、シェリダン⁹、オスカー・ワイルド、G・B・ショー、そ
して最後にジョン・シングなどがある。この中でも、シングは、夭逝の劇作
家であるが、最も偉大な人物である。シングは、農民の詩情、情熱、人生の
謎と怖れにまで深く切り込むユーモアを描いた点で、他の作家とは一線を画
している。シングを別にすると彼らには、豊かな機知と生氣、そして人を喜
ばせる力があり、古い道徳（分別など）に縛られることがない。しかしシン
グに比べて精神性はおろか、ほんの僅かばかりの詩情も拒むため、深い感情

を伝えることはない。そして、彼らの悲哀（ペーソス）は上品ではあるが、本物とは言えない。シングをおいて他に、『海へ騎りゆく人々』¹⁰を書き得る者などいなかっただろう。アイルランド独特のユーモアと哀しみの背後には、スウィフト（訳注 博士）のような意思と知性が存在するのだ。シングの先人たちによる上流階級向けの劇には、ただ、鋭い感受性が存在するだけである。楽しく、適切で、面白いものでなければ、すぐに興ざめとなる。シングの劇に反対する者は、美食に慣れてきた人々と同じで、上品な胃がそれに馴染めないのだ。スウィフト博士なら、シングの劇を観て、拍手喝采していたことだろう。

何年も前に、教養人たちの間で、アイルランド農民たちへの関心が生まれ始め、ロンドンやダブリンの楽しい客間に、或るものを付け加えていった。だが、当時、社会主義、共産主義、労働党、無政府主義は、餓死寸前にある深刻極まりない貧困を人々に教えるために生みだされたものではなかった。そのため、カールトンや他の作家たちは、アイルランド農民をうまく用い、貴婦人の部屋に適した筋書きに作り変える作業に取り掛かった。それゆえ、アイルランド人はみな親切で、お人好しである、という馬鹿げた伝説が現れた。ひどく滑稽なものではあるが、それでも悪くはない部類であった。他には、喜劇的なアイルランド人、つまり深刻ぶらず、ひいき客の笑いをとって生きる道化者が現れた。

シングの劇はこれらとは全く対照的なアイルランド人がいることを示そうとしている。そして、彼の描き方には、かなりの真実があるのだ。アイルランド人の性質には、精神性と詩情へ向かう側面がある。つまり、自然と人生の美しさに合わせて絶妙に調律された楽器のような性質がある、ということだ。これほど挑戦的で、角ばったあごをした（訳注 辛抱強いこと）、小柄な民族の中にあって、時折、面長で（訳注 繊細であること）穏やかな眼差しをもった別のタイプが散在している。このタイプのアイルランド人は、生と死と宗教の神秘を糧に想像力を育みながら、優しさと愛情を望むあらゆる者の前に生まれてくるのだ。

ステラ¹がこれほどまでにイングランド的な人物でなければ、このタイプの者に気づいたであろう。スウィフト（訳注 博士）に至っては、たぶん彼らが怖がって近づかなかったために、気づかなかったのだろう。しかし、ゴールドスミス博士は、スウィフト博士と変わらぬほど、真のアイルランド人であった。いかにシングが、アイルランド精神のこの一面をよく知っていたかについては、アラン諸島に関する作品において遺憾なく表現されている。もうひとつの面は、彼の劇において示されている。

「絵とは法律家が表す書面のように明確なものでなければならない」とブレイクは述べたが、シングはそのような絵を私たちに与えている。丹念に目を凝らす必要がある。趣味の良い文学を読んで成長した人間が、直ちに力あふれる文学を楽しめるわけではない。

「木片のひとつの節を穴があくほどに見つめていたら、身震いするものを感じた」と述べたのは、ウィリアム・ブレイクであった。これこそが、創造的な空想力で、民話やアラン諸島が有するものなのである。この地の人々は、自然と超自然の間に境界を一切設けようとはしない。あらゆることが奇跡によって成し遂げられるのだ、と信じている。一方、文明人は、全ての科学、理性、道德体系の背後にあらゆる知識を超越するものがあること、それが、愛と美がもたらす不断の奇跡によるものであること、を知らないのだ。文明人は、（真の）文化を得ることができないばかりか、望むこともできない。彼にとって、聖書は、シェリー（の詩）と同じぐらい不可解なのである。この地の農民たちは、例えば、ロックフェラー氏（訳注 米国の実業家）のような、優れた教育を受けていない。だが、農民たちは、この感情を持っている。この感情は、子供と詩人には信仰のようなもので、決して理性的思考を促すものではないが、知的生活すべての源である。

誤った教育とは、中国の母親が（訳注 纏足のため）子供の足を締め付けるようなものだ。真の教育とは、束縛から解放することである。産業化は、人を慰めることもなければ人の気分を高揚させようとも思わない、ひとりよがりの職人へと、この地の農民たちを変えてしまった。彼らは、強欲で、嫉

妬深く、貪欲で、ただ自分の成功だけを求めるようになった。だが、人間とは本来鳴き鳥のような存在なのだ。時には、子供や獣のように何も知らないままカゴの中で歌っている。そして、その鳥は、カゴが広々とし見た目に美しくとも、全く歌おうとせず、歌の心を持ち合わせていないこともある。真の教育とは、広々とした空のもとで知識と能力と望みを歌えるように、人間を解き放つことではなかろうか。

このような人々は、「芸術と共に暮らす人間に特有な感情」をいくらか持っている、とシングは述べている。また、女性の中には、「風変わりで、超自然的な表情が、顔に表れる」とも述べている。この民族は、最古の伝説や詩に示されているような、不思議な特性を持つ生活を送る、とシングは言っている。ある聖職者がアメリカから戻ってきたとき、召使いが「ご主人様のお帰りが嬉しい」と言ったことを話してくれた。「ご主人様が留守ですと、空気が孤独な色になりますから」と召使いは述べたという。この人々の言葉には、その生活と同様、美の色が付いている。それは、岩間の小さな水たまりのどれにも、青い空が映されているのに似ている。

シングの偉大な劇、『西の人気男』に関して述べると、主人公にクリスティ・マホンよりふさわしい人物を、シングは思いつかなかったに違いない。ある新聞の批評家が劇について書いたことであるが、クリスティは、弱虫でも、愚か者でもない。極めて困難な状況下におかれた、生まれながらの、若き詩人なのである。この点においてのみ、彼の葛藤は、通常より、少し激しいものとなる。彼には、酒で荒れ狂う父親がいるが、力が強く、癪癪持ちで手に負えない。彼は、強さに裏打ちされた残酷さから、少年以外の家族をみな追い払ってしまった。もちろん、クリスティは何の教育も受けていない。その生活状態は本当にひどいもので、とにかく生きていくため、空想の中で生活を送らねばならない。丘をさまよっては、密猟したり、ウサギを罠にかけたりした。ついには、父親を鋤で殴り、恐怖のあまり、家から逃げ去る。何日か旅した後、メイヨーにたどり着くと英雄になっていた。殺人者だからではなく、苦境にあるハンサムな男性であるからだ。また、物語の続きで証

明されるように、活発な上、たくましいからである。殺人について語るのは、自己宣伝からくる突然の気まぐれである。この若き詩人ほど巧妙に作られた人物はいない。その上、彼は自分をおびえさせることを好む。彼が殺人者であるなどと、誰も本当には信じていない。また、後家クインは馬鹿にして信じていない。後に、クリスティが本当に父親を殺したのだと思い込んで、みなは彼と敵対する。恋人は心を痛めながらも、彼を法の手引き渡す動きに加わる。

うまく構成された劇には全て、興味の中心となる点が存在し、他の出来事は全てその点に収斂する。クリスティの恋人、ペギーンの持つ個性が、ここでは興味の中心となる。彼女は、他の人物の上にそびえ立つ存在であるが、これは、精神力だけではなく、乙女らしい純粹さと女神ディアナのような激しさによるものである。とんでもないユーモアで、下品な発言をしても、他人の言動によっても、その輝きを汚すことはできない。恋人同士の会話において、クリスティが想像力と詩人の空想だけで生みだされているに対し、ペギーンは、心と情熱、そして、農民女性の良識そのものから生みだされている。アイルランド西部に住む農民の中にこそ、詩的な劇作家は、今後、機会を見つけないければならない。アメリカの若き紳士、淑女は、非現実的な考えを持つ。授業に出席し、見せかけだけの自己改善、という雰囲気の中で講義を聴いて成長する。その結果、この農民の少女が、若木のようにまっすぐ、高く成長していくような環境のことなど何も知らない。いつの日か、シングがこの劇において、アイルランドの農民の少女に対する賛辞を示している、ということが認識されるときが来るであろう。「クリスティ・マホン、あたしの話がそんなに優しく聞こえるとは思議ね。あたしの口わると来たら、ここいらの国中に怖がられていたんだのに。ほんとに、人の心は不思議なものだ。今日の今から、メヨの土地に、あたしたちのようなしゃれた恋仲はまたとあるまい」¹²。

アイルランド西部に住む農民は、クリスティ・マホンに似ている。悲しみと危険と無知が日常の一部で、クリスティのように、想像的な生活を送って

いる。農民たちに重くのしかかるものから解放し、想像的な生活をさらに続けられるようにしなければならない。

シングは、一風変わった経歴を持つ。職業として音楽を始め、ドイツとローマとパリで教育を受けた。ほんのわずかな収入しかなかったので、節約のため、いつも貧しい人々と一緒に暮らしていた。パリでは、料理人の男性と、その妻でドレスメーカーをしている女性のところに住んでいた。その家には、居間がひとつしかなく、そこで、夫が料理をし、妻が針仕事をし、別のお針子が手伝っていた、とシングが言っていた。時々、帽子の大口注文が入ることがあった。シングはこの時には、言語学のために音楽をあきらめていた。そのため、勉強をやめて、自分も帽子製作に加わり、針金を曲げるなどしていた。一年かそこら経って、ホテルに移り住んだが、そこで私の息子と出会った¹³。息子は、シングにパリを出て、アイルランド西部へ行って、アイルランド語を研究するよう、説得した。それ以後、西部の農民たちの中で、毎年冬の大半を過ごすようになった。家族の一員として生活し、互いをクリスチャン・ネームで呼び合った。最高のホテルに泊まるより、彼らと暮らすほうが好む、と話していた。

シングは、これまで会った人物の中で、道徳的に最も潔癖すぎる人間の一人であった。同時に、非常に神経質で、高慢な上、恥ずべきことに対してはかんしゃくを起こす。がっしりとした体格の、筋骨たくましい男性で、肩幅が広く、頭を堂々と上げて歩いていた。大きく、薄い、緑みがかった茶色の眼をしており、その眼は、まっすぐに相手を見据えるものだった。シングの語り口には、アラン諸島に関する著作と同様、終始率直な魅力があった。成人男性や芸術家には珍しい性質であるが、それは何よりも大切なものであった。自分だけでなく、他人を欺くこともなかった。だが、詩人のように何かに取り憑かれているようなところがあった。情熱と誠実さが結びついている、という点において、他の偉大なアイルランド人である、マイケル・ダヴィッド¹⁴に似ている。ダヴィッドと同様、人との争いを望むことはなかった。意志堅固であるが、本来は優しく、平和主義者であった。

注釈

初出は“Synge and the Irish” (Harper’s Weekly, 1911)

訳出には以下のものを使用した。

John Butler Yeats, *Essays: Irish and American* (Dublin and London: The Talbot Press Ltd., 1918).

注

1. ジョン・ミリントン・シング (John Millington Synge, 1871-1909)：以下のよ
うな戯曲があり、アイルランド文芸復興の中心的役割を担った。
『海に騎り行く人々』 *Riders to the Sea* (1904)
『聖者の泉』 *The Well of the Saints* (1905)
『アラン諸島』 *The Aran Islands* (1907)
『西国の人気男』 *The Playboy of the Western World* (1907)
2. ジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950)：劇作家と
して多くの戯曲を手がけた。
3. オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900)：詩人、小説家、劇作家。オッ
クスフォード大学在学中に、W・H・ペーター (Walter Horatio Pater, 1839-
94) の唯美主義に影響を受ける。卒業後ロンドンに出て社交界の人気者となり、
芸術至上主義を作品で唱えるとともにそれを実践した。
4. アラン諸島はイニシュモア、イニシュマーン、イニシエアの3島からなる。こ
の頃ゲール語が失われつつありシングが島に滞在した1898年当時、アイルラ
ンド語復興をめざすゲール語連盟の支部が発足し活動を開始している。
5. 中国人女性に行われた纏足のこと。
6. ジョン・ピルポート・カラン (John Philpot Curran, 1750-1817)：コーク州生
まれの政治家。カトリック教徒解放運動などの問題で妥協するより、決闘を挑
む潔い態度は人々の人気を博した。彼の機知に富む雄弁ぶりには定評があった。
7. ジョージ・ファーカー (George Farquhar, 1677-1707)：英国国教会聖職者の子
として生まれた。アイルランドの劇作家。
8. オリバー・ゴルドスミス (Oliver Goldsmith, 1728-74)：聖職者の子。「廃村」
“The Deserted Village” (1770) で知られる。
9. リチャード・ブリンズリー・シェルダン (Richard Brinsley Sheridan, 1751-
1816)：ダブリン出身の劇作家。機知と風刺に富んだ喜劇で知られる。『恋敵』
The Rivals (1775) で知られる。

10. 『海に騎り行く人々』 *Riders to the Sea* (1911)：シングの劇。最初に上演されたときは酷評ばかりであったと言われる。「お通夜じみた劇」（「アイリッシュ・タイムス」）と批判された。
11. スウィフトは有力な外交官兼議員のウィリアム・テンプル卿（Sir William Temple, 1628-99）の庇護を受けてイギリスに逃れる。テンプルが後見人を務める14才年下の「ステラ」（エスター・ジャクソン）の家庭教師となる。以後、生涯に渡ってステラはスウィフトと親密な関係を続けた。
12. ジョン・ミリントン・シング著 松村みね子訳『シング戯曲全集』沖積舎、2000年、246頁。
13. W・B・イエイツ（William Butler Yeats, 1865-1939）との出会い：パリでフランス文学を学んでいた時、W・B・イエイツと知り合う。イエイツの勧めで1898年にアラン諸島を訪ねて、アラン島で昔話・伝承を採集する。当時のゲール文化復興に貢献した。
イエイツがシングと初めて会ったのは1896年の秋のことだった。イエイツが31歳、シングが24歳のときのことである。シングはパリにいてイタリアの旅から帰ってきたところだった。パリではフランス文学を学んでいた。イエイツは彼からトリニティーコレッジでアイルランド語を学んだことを聞く。そこでイエイツはシングに対して「私は彼にアラン諸島に行って、何もかもが表現される生活ではなく、決して文学で表現されてこなかった生活を見つけるように勧めた。彼の才能を信じたのではなく、彼の病的な生活から連れ出すものが必要だと感じたのだ。たぶん、アイルランド語を学んだ若手の作家になら誰にでも同じことを勧めただろう」と述べたことを回想している。
W. B. Yeats, *Autobiographies* (London: Macmillan, 1955), p. 343.
14. マイケル・ダヴィット（Michael Davitt, 1846-1906）：アイルランド飢饉の年、1846年にメイヨーで生まれた。アイルランド土地同盟（the Irish Land League）を創立し、民族運動を指導する。1892年と1895年に国会議員に選出される。